近衛の忍

ショコ公

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
近衛の忍

【Ｎコード】
Ｎ２５１７Ｓ

【作者名】
ショコ公

【あらすじ】
俺こと真田仁は忍者だ。いまどき忍者？って言う奴もいるだろうが実際にそうなのだから仕方が無い。
ガキの頃になんの因果か魔法世界に迷い込みなんだかんだで帰って来れた俺。
もう面倒ごとはゴメンだと思いながら故郷に帰ってきたのが運の尽き。それからの日常はとてもめんどくさい事になったのだ。
縁側でお日様にでもあたりながら昼寝をするのが俺の夢。はてさてそんな日常を俺は送ることができるのかね？

故郷の匂いはアンモニア（前書き）

この物語は二次創作です。この言葉に嫌悪感を覚える方はお帰りください。

完結目指して頑張りたいと思います。感想、アドバイスなどなど待ってます。

故郷の匂いはアンモニア

「だから真田仁が帰ってきたって詠春さんに伝えてくれれば大丈夫だって言ってんだろ！」

「先程も申しましたが、こちらに連絡がきていない者を長に合わせる訳にはいきません。お帰りください」

目の前の男に自分の要件を怒鳴りつけるが男は涼しい顔をしたままこっちの要件を受け流す。その涼しい顔にただでさえイライラしているのに憎しみが湧いてくる。

九年ぶりに魔法世界から何とか戻ってこれて、詠春さんに生存報告をしようとしたところで関西呪術協会の門番に捕まっていた。この門番、堅物なのか融通が利かず同じような問答を三十分ぐらい繰り返していた。

「ああ、もう分かったよ。帰りますよ、帰らせていただきます。このクソやろう！」

「いやぁ～良かった。やっとお帰りいただける。このままだと貴方を不審人物として然るべきところに然るべき対処をお願いしているところでしたよ」

「っ！このクソやろうが。覚えとけ！いつかそのすました顔にグーパンうちこんでやらぁ」

「おや、それは恐い。夜道に気をつけることにしますよ」

無表情だった顔を歪ませコチラに笑みを向けたまま手を振る門番。それを忌々しげに睨みながら山を降りる。

階段を一段、一段踏みしめながら降りていく。そのたびに鳥の鳴き声が木の間から響いてくる。

「行きは急いでたから気づかなかったけどこれぞ日本って感じだなぁ。魔法界は四季なんて殆ど感じなかったしなぁ」

さっきまでのイライラは消えていて気付けば独り言を呟いていた。

しばらく歩くとあまり使われていないであろう木で作られたベン

チがあった。こんな所まで足を運ぶ酔狂な人間はなかなかいないのがよーく分かる。
ベンチに座ってタバコを口に加え火をつける。頭がボーッとなる感じがたまらない。
タバコの先から煙がうねりながら消えていく。それを目で追っているといつの間にか空を見上げていた。
「しかし、どうしたものか」
九年もの間コチラの世界からは消えていたわけで、世間ではきっと俺は死亡扱いだろう。そうなると金を稼ぎたくても稼げないわけで。
財布を開けると漱石が一人だけ優しく微笑んでいた。その微笑みに釣られて自虐的な笑いが生まれてくる。
「平和な現代日本で餓死って笑い話にもならねえだろ」
詠春さんに会えればこんなことで悩む必要もなかったのだが。そう思うと同時に門番の対応を思い出す。何故か膝を小刻みに揺すっていた。イライラは消えてなかったようだ。
「しょうがねぇ。夜に忍び込むか。悩むのもメンドくせぇ」
詠春さんと会わないと日常生活を送るのも困難だ。なにせ戸籍がない。つーか日本国民ですらなくなってるんだ。今の俺は死人が歩いてるようなもんだから。
「さーて、そうと決まったら夜まで暇だし可愛いお嬢さんでも探しに行きますか！ふへへへ」
素敵な出会いを願いつつベンチから勢い良く立ち上がる。その時足に違和感を感じた。とてつもなく熱いのだ。
視線を下に向ける。そこにはさっきまで吸っていたタバコが草履を履いている俺の足に乗っかていた。
あぁ、なるほど。くわえてたタバコ叫んだ時に落としっちゃったのね。そりゃ熱いわ、うん。
冷静に思考は働くがその状態が何時までも続くわけでもなく。
「どうぉあっちゃぁぁぁぁ！」

喉の奥から嘘偽り無い、俺の思いが飛び出した。
その様子を下から登ってきたじーさんに冷めた目で見られた。その瞳にはナニかクルものがあってそそくさと俺はその場から立ち去る。
なんだろう、今日の俺ってツイてねぇ。

「はいごめんなさいねっと」
「ぐぁっ！」
目の前の男の首筋を叩く。倒れて音を出されても困るので抱えて静かに床に寝かせる。
「はーてさて、詠春さんの部屋は何処だったかなーっと」
縁側を音を立てないように歩く。そんな事をしなくても普段から癖で物音は立てないのだが。
障子の奥にはゆらゆらと火が灯っていて人の影が見える。月明かりにも照らされていて蛍光灯などといった俗なものもなく十分に明るかった。
しばらく記憶を頼りに歩くと強烈な既視感を感じる部屋を見つけた。
「そうだ。ココだよ此処。いやー懐かしい。詠春さん元気かな？」
脳裏にはいつもヤンチャばかりしていた俺を微笑みながら見つめるメガネを掛けている中年の男が映っていた。
懐かしさを感じながら部屋に近づく。するとどこかで見たような男が詠春さんの部屋から出てきた。
その男は忌々しいことだがイケメンでその整った顔を涼しげにみせている。朝、俺と言い合いをしていた男だった。
なんて幸運だ。朝の仕返しができるチャンスがくるなんて。ツイてないと思っていたがツイてるじゃないか。落として持ち上げるとかどんだけ運命って奴は人の扱い方がうまいんだ。

「どうもー。今朝ぶりっすねー」
「なっ！あんたは朝の」
「元気でした？」
「ああ、元気だったよ。でもいいのかい君。こんなところにいるなんて不法侵入だよ」
「だめじゃないっすかー。夜道に気をつけなきゃ」
「まさか君、それだけの為に！？」
懐からクナイを取り出す。それを見て男が怯え出す。
「や、やめろ。此処がどこか分かってるのか？君もただじゃ済まないぞ」
「いやー、俺好きな言葉があってそのとおりに生きようと思ってるんですよね」
「な、なんだいそれは？それより早くそれを仕舞ってくれ！」
「有言実行っていい言葉だと思いません」
言葉が言い終わると同時にクナイをぶん投げる。もちろん当てる気など無く全く見当違いの方に投げた。
男は声にならない悲鳴を上げ目をつむり倒れこんだ。それを見て男に近づき顔面に向かって右拳をぶつけた。
男は白目を向き失禁しながら気絶した。
「ひっひひひはははは。だせーションベン漏らすとかありえねぇ。あぁー楽しかった」
ザマミロと男を一瞥し詠春さんの部屋に入る。
「どうもお久しぶりです。詠春さん」
部屋には記憶より老けた詠春さんがこっちを見て固まっていた。服装が変だったのだろうか。そんなに変な服は着ていないと思うんだが。
「仁君、ですか？」
「そうですよー。九年ぶりですね。それにしても一目でよく分かりましたね」
「見間違えるわけありませんよ。貴方は息子と言っても過言じゃ

ない存在なんですから」
そう言って詠春さんは涙ぐみながら笑みを浮かべる。その様子に俺も少し涙ぐみそうになった。
「そう言われると照れますね」
「積もる話もありますから別の部屋で話をしましょう」
「そうですね」
「ああ、それと」
「？　なんですか」
「おかえりなさい」
満面の笑みで詠春さんはその場から去っていった。それを見た俺はしばらく何が起きたか理解できず立ち尽くしていた。
「あ、そうか俺帰って来れたんだ」
口元に手を当てると歪んでおり自分が笑みを浮かべているのにその時初めて気づいた。

五月はなんだかんだで寒かった

新月の夜、暗い森の中で異形共が蠢いていた。ある者は一つしか目がなかったり、またある者は角が生えてたり。まぁそいつらの共通点はどいつもこいつもとんでもなくでかいってことだ。

瞬きをしている一瞬でその異形たちは真っ二つになって宙に浮いていた。内蔵が飛び出したりだとかそんなグロテスクな場面は起きず、異形共は消えて言った。

隣にはとんでもなく長い日本刀を鞘に戻している美少女が息を整えている。美少女のその行動だけで俺は襲いかかりそうになる。いい匂いがするんだよなー、この子。

「いやー、強いねぇ刹那ちゃん。さすが神鳴流始まって以来の天才」

「黙っていろ。まだ仕事は終っていない」

「きっついなー、同じ任務請け負った仲間じゃないか。それより今度どっかに遊びに行かない」

「黙っていろと言ったはずだ。それに貴様を仲間とは認めていない。次、寝ぼけたこと言ったらたたっ切るぞ」

鋭く睨みながら低い声が美少女、桜咲刹那から返ってくる。それに対し何も俺が反応しないと満足したのか視線を森の方に戻した。

なかなかに辛辣な意見だった。俺の心はそれでズタボロ、でもちょっと気持ちいいかもみたいな感じだ。全くの嘘だが。俺はいじめられて喜ぶ趣味はない、筈だと思いたい。

きつい対応も美少女だから許される。さっきの素っ気無い態度も可愛いものだ。・・・・・・これが出会ってから一ヶ月立っていなければの話だが。さすがに一ヶ月も信用してないオーラをぶつけられれば悲しくもなってくる。

最初にあってからこのような態度を刹那ちゃんはとっていたため、このような関係の改善策を見つけることが出来ていない。もしかし

て俺の顔がきもいだとかそんな感じなのだろうか。そうであったなら一生この関係に終止符を打たれることはない気がしてくる。
木の上に目を向ける。夜の闇に紛れていて見難いが一人の少女が樹の枝にもたれかかっている。暗さで種類は分からないがスナイパーライフルを手に構えていた。セーラー服とスナイパーライフル、何かのタイトルみたいな考えが浮かぶ。ちなみに少女はセーラー服じゃない。
「真名ちゃん、大丈夫？」
「ああ」
「本当に？結構長い間そこで構えてるけど」
「ああ」
「真名ちゃんが言うなら大丈夫なんだろうね」
「ああ」
「今度デートしよう」
「・・・・・・」
俺のお誘いは無言によって否定された。無言は肯定と受け取るって誘う前に言っておけばよかった。言ったら言ったで拒否されていたことが容易に想像できるが。
龍宮真名、肌が黒い中学生とは思えないボディを持つ美人さんだ。胸のデカさがヤバい。あれで中一は詐欺だと思う。
真名ちゃんとは一ヶ月たってもまともに会話を成立させることが出来ていない。刹那ちゃんは罵声を浴びせながらもなんだかんだで相手をしてくれるのだが真名ちゃんは違う。言葉を投げかけても生返事が返ってくるだけなのだ。
そのせいで未だに真名ちゃんの性格を掴みきれていない。かなりの美少女だからお近づきになりたいんだけどなー。
この前真名ちゃんがペンダントを見つめながら悲しそうに胸を押さえているのを見かけた。何かあったのだろうか。聞いた瞬間に額に風穴が空きそうだから聞いていないけど。美少女の悲しい顔はみたくないものだ。

詠春さんにあった後、俺は麻帆良学園都市にくることになった。何でも自分の娘の護衛をして欲しいという話だった。詠春さんの娘、近衛木乃香はかなりの魔力の持ち主で魔法使いにとって喉から手が出るほど手に入れた存在だそうだ。俺としても他に仕事の当てもなく引き受け仕事に励んでいる。

麻帆良学園都市というのはかなり珍しい場所で、一般人に魔法をバレるのを防ぐ魔法使いが何故か自治しているというなかなかにぶっ飛んだ場所だ。魔法的に価値があるものだとか過去の因縁だとか、さっき語った詠春さんの娘などなど魅力的な物がいっぱいでそれに釣られてくるコワーイおじさんがたくさんいるらしい。

俺は木乃香ちゃんの護衛だけが仕事だと思っていたのだが、此処のお偉いさんにうまく丸め込められそのこわーいおじさん達を撃退する仕事まで増やされてしまった。

それでチームのメンバー、つまり刹那ちゃんと真名ちゃんと一緒に仕事に励んでいるわけだ。

ポケットの携帯が震えて自己主張をしてくる。それを取り出し耳に当てた。

「仁くんかの？今回の侵入者はもう全員捕まったからお仕事終了じゃ。ご苦労様」

「うぃーす」

電話を切ってポッケにしまう。

「今日はお仕事終わりだってよ。夜も暗いし送って・・・・・・」

言い終わる前に二人は立ち去っていた。思わずため息を出す。

「詠春さん。結構キツイです。俺なんか嫌われることしたんでしょうか」

遠い地の父親がわりにつぶやく。それで返事が返ってくるわけもなく。

風がワサワサと木を揺らす。さっきまで感じ無かった寒さが一気にこみ上げて来る。

「帰ろ・・・・・・」

人のぬくもりが恋しい五月の事だった。

尻よりおっぱい

「どうすればいいと思う」
「いや、何を？」
「刹那ちゃんと真名ちゃんが冷たいんだ。チームなのにこのままではいけないだろ。いけないに決まってる。可愛い少女と仲良くなれないなんて。だから、どうすればいい」
「おまえなぁ」
目の前にいる男、中村達也はため息を付きジト目でこっちを見てくる。その動作が様になっているのがムカツイた。とりあえず殴っておく。
「ナニするんだ」
「イケメンは死ねばいいと思わないか」
「イケメンなんてどこにいるんだ？」
キョロキョロと達也は周りを見渡す。自覚なしなのかよ、尚更ムカつくな。チョップ連打を追加。
「いてぇ、痛いって」
「すまん、やり過ぎた」
言葉に不快感が滲み出てきたので達也への攻撃をやめる。
「で、なんだっけ」
「チームの美少女と仲良くするにはどうすればいいか聞いてたんだ」
「はぁ」
またため息を付かれる。俺の相談はそんなに間抜けだったのだろうか。
「確かにチームワークのためにも仲良くするのは大事だろうさ。でもお前の仲良くには下心が混じっているだろうが」
「下心を抜いたら俺が俺じゃなくなるだろうが。お前はおっぱいの膨らみについて何も感じないのか」

「だから、そうゆう思考回路してるから嫌われてるんじゃないのか？あと胸よりは尻の膨らみのほうが気になるぞ俺は」
「おっぱいだろ」
「尻だね」
睨み合うこと三十秒。
議論がズレていることに気付く。堰をして場をごまかす。
「そんなことは置いといて。いや、決しておっぱいを蔑ろにしてるわけじゃないぞ」
ブンブンと手を振る俺。おっぱいに対しての思いが弱いとは思われたくない。
「分かってるって。でどうすればいいかって話だよな」
達也は腕を組み悩み始めた。なんだかんだ言って協力してくれるようだ。
「刹那ちゃんとはどんな感じなんだ」
「話しかければ罵声が飛んでくる」
「うわぁ、相当嫌われてるじゃん」
「残念なことにな」
大げさに驚く達也。そこまで驚かなくてもいいじゃん。
脳裏にはこっちを冷たい目で見てくる刹那ちゃん。どうにかして仲良くなれないものか。
「いつからそんな感じなんだ？」
「あった時からだな」
「それは・・・・・・。ナンカ可笑しくね？」
「俺もそう思う。昔にあった覚えもないしさ。・・・・・・今考えると理不尽だよな」
「嫌われてる理由もわからないのか。それじゃあどうしようもないな。しょうがない、刹那ちゃんについては一旦おいておこう」
「そうだな」
達也の言うとおり理由が分からなければどう仕様も無い。だからといってあきらめはしないが。

「真名ちゃんは？」
「まともに会話が成立したことが無い」
「そりゃまた」
「でも彼女の場合、俺が嫌いってわけじゃなくて誰が相手でもあんな感じだよな」
「確かに。他のこと喋ったりしてる姿も見たこないしな」
刹那ちゃんよりはとっつきやすそうではあるがそこまで難易度は変わらない。
「とりあえずは会話を成立させないとな」
「やっぱそうかね」
「そうじゃないとどう仕様も無いだろ」
「確かに」
今日の放課後にでも話してみるとするか。
「サンキュー達也。」
「気にすんな。同じ部屋兼仕事仲間のよしみだ」
「それでもだよ。今日の放課後、頑張ってみるぜ」
サムズアップして達也を見る。
「おう頑張れ」

「真名ちゃん。遊びに行かない？」
「・・・・・・」
無言。返事の一つも返ってこない。分かっていたことだけれど悲しい物がある。
悲しさに打ちひしがられている間に大きなギターバックを背負いながらさっさと歩き去ってしまった。コチラには一瞥もしずに。というか瞳に何も映していないようにも見えた。
「そういえばこの前ペンダント見てたけど、あれ大事なモノなの？」
真名ちゃんの興味を惹くために何気なく聞いてみる。

ピタリと真名ちゃんの動きが止まる。かと思えばいつの間にかぶん投げられていた。
背中に走る激痛。受身を取ることもできず苦しみもがく。
「あべｒｊｋｔｆｇｂｊｋｄｆｋｆｈぎおｄｆ」
地べたに這い蹲る虫みたいに痛みを全身で表現する。周りの人達は俺に釘付けだ、きっと俺の痛みが彼らにも伝わったのだろう。以心伝心、その言葉の意味を理解できた。まぁ、そんなワケもなく、周りの人は街中で変な行動をしている俺を怪訝そうに見ているだけなのだが。
「人のプライベートを詮索するもんじゃないよ」
さっきまで何も映していなかった真名ちゃんの瞳に今は俺が映っていた。もちろん憎悪と一緒に。
その目を見て俺は少し嬉しかった。なぜなら今まで無表情であった真名ちゃんの新たな表情を引き出せたのだから。引き出せた表情が怒りってのはこの際置いておく。
背中の痛みはどこかに消えていったので立ち上がる。まだ腰のあたりの痛みがヒリヒリと存在感をアピールしている。
「それはごめん。お詫びになんか奢るからどっか行かない」
「もう私に関わらないでくれ」
真名ちゃんの瞳はまた何も映さなくなった。
あーあ、失敗か。これから毎晩ギスギスした空気の中仕事をしなくてはならないらしい。
長すぎて目を隠している前髪を掻き上げる。すると何故か真名ちゃんは驚いた顔をして呟いた。
「コ、コウキ！　お前か、お前なんだな！？」
意味が分からず詰め寄る真名ちゃんを不思議に思いながら俺は固まっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2517s/

近衛の忍

2011年10月8日22時14分発行